

「一つ消え、二つ消え」

内水面試験場 長谷川理

内水面試験場は、当地(相模原市緑区大島)に開設されてから 20 年以上の歳月が経過しており、老朽化により、あちらこちらで修繕の必要な箇所が生じています。

現在、私が使用している研究棟で、ヤマメを飼育している屋内の池の照明が特に老朽化しています。

事務室や実験室などのある本館の照明は、すでに蛍光灯から LED 照明に更新されているのですが、魚類を飼育している施設の照明は未だに蛍光灯のままです。最近では蛍光管が切れ、新品のものに交換しても灯具そのものが老朽化しているために、点灯しない箇所が続出し、飼育室が少しずつ暗くなっています。また、当試験場が開設した当時は、研究予算も施設の維持費もそれなりにあったのですが、現在の当試験場を取り巻く研究環境は予算的にも、人力的にも厳しい状況が続いています。決して人にも魚にも満足のいく状況ではありませんが、騙し騙し工夫しながら飼育をしています。近い将来、せめて飼育施設の照明が LED に更新され、明るい職場環境を保っていきたいと願う今日この頃です。

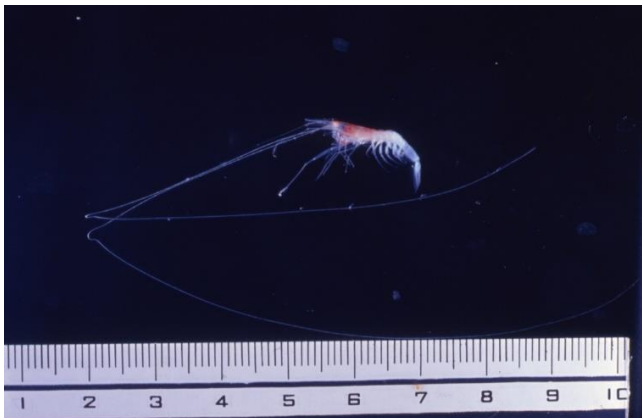
思い出のサクラエビ調査

相模湾試験場 一色竜也

先日、会議で水産技術センター本所を訪れたとき、若い職員に呼び止められました。彼女が言うには、古い資料が数多く出てきたので確認してほしいとのことでした。早速、見てみたところ、私が若いころにまとめたサクラエビ調査の研究報告の別刷りもその中から出てきました。1つが1992年、その続編が1996年とありますので、どちらもほぼ四半世紀前のものです。

サクラエビ調査は1991～1992年の2か年間、久里浜沖において、未だ漁業利用がされていないサクラエビの漁業資源評価を行う目的で実施しました。調査では、周年にわたってサクラエビの採集を試みることや、得られたサンプルを分析して、季節的な成長度合いと再生産の有無の確認、駿河湾のサクラエビ資源との分布密度の比較による資源量推定を行いました。サンプリングは2か月に1度、調査船で東京湾口に出向き、夜間、サクラエビが海底から上層に浮いて集まってくるのを狙い、網で曳いて行いました。東京湾口は全国的にも船の往来の非常に激しいところです。見通しの悪い夜間に、小さな調査船で東京湾に出入りする大型船の間を縫って網を曳航するため、大変緊張を要する調査であったことを覚えています。こうして得られた貴重なサンプルから、東京湾口でもサクラエビが周年分布することや、再生産が行われていること、資源量が駿河湾の1/10にも満たないことが分かってきました。そのため調査は行いましたが、結果的にはその資源密度の低さから、サクラエビは東京湾口の新しい漁獲対象資源にはなりませんでした。

昨年度、相模湾試験場に異動し、相模湾で漁をする漁師さんからの様々な話をお聞きし、その中から相模湾の定置網でも時々サクラエビが入ることや、漁獲されるマアジの胃の中からサクラエビが多数見つかるとの話がありました。相模湾も西側は海底が陸近くまで深く切れ込んでおり、駿河湾と同じような海底地形をしています。もしかするとサクラエビが多くいるのかもしれませんが。機会があったら調べてみたいものです。



東京湾口で獲れたサクラエビ